名前は世につれ

「土曜寸言」030104

「寿限無寿限無五劫の擦切（じゅげむじゅげむごこうのすりきれ）：」は、ご存知落語「寿限無」に登場する主人公長助の名前である。長過ぎる名前を持つことによって起こる不都合を笑うのがこの落語の主題である。人名が、他者から区別するというだけの目的であれば、この名前は十分過ぎるほどに役目を果たしているが、簡潔さも必要な要素であるからこの異常な長さは不都合だと言わざるを得ない。しかし、タイのバンコク市や巨匠ピカソなど寿限無級の長い名前は実在する。

同じ落語十八番の名作「鰍沢」に登場する主人公の名は「お熊」。男のような名前だが実はお熊はぞっとするほどの美女だ。そういえば、この時代の女性には虎だの、鹿だの、駒だのとあまり美貌を連想させない名前が多い。これは幼児死亡率の高い時代にいかつい名前をつけることで、悪魔に可愛い女児だとさとられないようにと、長命を願った親心だったのである。

時代も下って筆者の同年配者には無闇に勇ましい名前が目立つ。「英雄」、「勝利」、「征治」などは、誕生時に戦争があったことを示している。筆者の名前なども南の島々を掠め取ろうという野望が潜んでいて、六十余年も付き合っていながらいまだに好きになれない。

戦い済んで平和が訪れると「美子」さんや「和子」さん、また皇室の典雅な儀式がある「美智子」さんなどが急増したが、総じて美しく、両親の私的な憧れや理想を込めたもので、国策に沿った集団ヒステリー的な命名は消えていった。

今年も千枚を超える年賀状を頂いた。大半は「迎春」に住所氏名などという面白くも何とも無い賀状で、浮世の付き合いに疲れて投げやりになっているものばかりなのだが、まだ人生に懲りていない若い友人達のものは新鮮だ。新たに参入してきた家族の名前と一家のカラー写真。そして、その新規参入者の名前がふるっているのだ。「鮎夢」、「七海」、「海斗」、「亜久里」、「碧斗」。重箱読みなど気にしない。

筆者の記憶では、この種の万葉仮名的命名は、バブル時代に始まったように思う。すでに小学校では先生が教室で児童の名前を読めなくて困っているらしい。しかし、バブル経済がはじけた頃から、この種の奇抜さを競う風潮はいよいよ勢いを増し、いまや猖獗？を極めている。

そして、この奇抜な命名の文化は人名に止まらない。実は、バブルを演出し、不良債権に苦しむ金融機関もまた同工異曲を奏でている。ことほど左様「歌」に限らず「名前は世につれ、世は名前につれ」なのだ。